
愛する人への贈り物

明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する人への贈り物

【Nコード】

N1012A

【作者名】

明

【あらすじ】

好きな人に告白できない貢^{みつぐ}が音楽を通して成長していき、好きな人に捧げる音楽を見つけていくラブストーリー(?)です。

ゝ第一話ゝ（前書き）

連載小説は初めてですが読んでいただけたら幸いです。
感想をいただけるとうれしいですー（＾ー）ー

く 第一話 く

俺の名前は平 貢 たいら みつぐ 17才。

高校2年生でバンドをやってる。

バンドを始めたきっかけは友達に誘われたから。

中学の頃からギターはやってたんだけどバンドは組んでなかった。

「貢！今日は練習あるの？」

話しかけてきたのは森下 もりした 華蓮 かれん 同級生の女の子。

これもバンドを始めた理由のひとつ。

この子が気になってたから・・・。

「ん？ああ多分あると思うよ。」

「そっかあー！じゃあ見に行こうかな。」

「どーぞどーぞ見に来てくださいな。」

華蓮と俺は付き合ってるわけじゃない。

まあ、ただ単に俺が告白しようとしただけだ。

理由は簡単。

華蓮と今以上の

「距離」

をとりたくなかった。

ようするにびびってるわけだ。

情けないと思うかもしれないが、どうも色恋沙汰は昔から苦手だ。

そのくせいつも片思い。悪い循環を繰り返して一人で苦しんでる。

だから自分を変えたかった。

これもバンドをやってる理由のひとつだ。

「おう！貢、おはようさん！」

話しかけてきたのはバンドのボーカルである北原 きたはら 彪 たけし

こいつも同級生である。

まあ中学の頃から付き合いがあるので腐れ縁とでも言っておこうか。
彪はモテる！ハンパではない。

しかも歌もうまい、勉強もできる、運動神経抜群。
非の打ち所がない。

なんでこいつと俺が友達としてつりあってるのかわからない。
ちなみに華蓮は彪に告白したそうだ。

結果は惨敗。

なぜ振られたのかというと、彪が俺を気遣って適当な理由で振った
ようだった。

その告白された後、彪は俺にこういった。

「あゝあ、あんなにかわいい子振ってしまったわ。

どっかの誰かさんは早くあの子に告白せんのかなあ？

手の届かない存在になってしまふぞ。」

この言葉は俺の心の深いところに触れた。

そして俺は決意する。

俺の想いを乗せて華蓮の心に届く歌をつくってみせろ、と。

ゝ第二話ゝ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。引き続き二話、三話と掲載できるようがんばります。

く第二話く（前書き）

第一話に引き続き第二話となります。

もし読み終わった後、感想がありましたら書き込んでいただくとうれしいです。

〈第二話〉

華蓮、彪との会話が終わった後俺は、教室に戻り授業を受けた。そして放課後。

俺は音楽室へ向かう。

バンドの練習があるためだ。

音楽室に着くともう既にドラムとベース、それに彪もそろっていた。もちろん華蓮も。

用意をしていると彪が

「華蓮ちゃんに来てるからって張り切りすぎんなよ。けけけ。」
と言ったので

「そんなん気にしてねーよ」

とだけ答えた。

「気にしない」

なんて大ウソだ。

めちゃくちゃ気になる。好きな子が見てるのに気にしないはずがない。

しかしなるべく気にしないようにしてる。

意識し過ぎると相手に気付かれてしまうから。

とまあそんなやりとりがありつつさっそく練習開始。

俺たちはコピーではなくオリジナルをやっている。

最初は曲を作るのに苦労したが今ではかなりさくさく作れるようになった。

それは華蓮のおかげでもある。

華蓮は結構いろいろな音楽を聞いているようで、いろいろなアドバイスをくれる。

そしてその中のいろいろな部分から華蓮が好きだという音楽を聞き出し、バンドの曲とは別に俺はオリジナルを作っている。

もちろんそれは華蓮の心に届くような歌を作るため。

ちなみにバンドの練習時間は一日約2、3時間というところ。
あとは各自自主トレと言った感じである。
活動時間としてはかなり短い。

土日はだいたい一日中練習しているが、平日の練習時間はさすがに短い。

話を元に戻そう。

練習を開始した俺たちはかなり感じよく練習できた。
いつもより演奏時に一体感があった。

ちなみにこれも華蓮効果というものだろう。

華蓮がきたときはみんな張り切る。

女の子の見てる前で無様な演奏はできないからだ。

練習をしているとあつと言う間に時間が過ぎる。

そして解散。

今日は運良く華蓮と一緒に帰ることができた。

歩いている時の話の話題はやはり音楽のことばかりである。

そして

「危ないから」

と言つて華蓮を家まで送つていった。

それから俺は家路をたどる。

歩きながらふと考えた。

「俺の音楽が華蓮の心に触れる日はくるのかな？」
と。

ゝ第二話ゝ（後書き）

第二話を読んでいただけて大変うれしいです。

まだ第三話、第四話と 続くので読んでいただけたらと思います。

ゝ第三話ゝ 終（前書き）

これで最後です。見てくださったみなさんありがとうございました
m(――)m

またこれからも少しずつ新しい小説を投稿していくつもりなので
これからよろしくお願いしますo(＾-＾)o

第三話 終

試行錯誤しながらの曲作りはかなりしんどい。オリジナルとは自分から出てきた言葉なり楽曲であつたりするからだ。

しかもまだ経験が浅い。

またそんな恋愛感情を込めた歌なんて作ったことがない。

まいった。彪にはいろいろ話しているのでアドバイスをもらったりもしている。明日学校が休みなので彪を家に呼んだ。

理由はオリジナルを完成させるため。

何しろ学校祭が近い。

俺たちは学校祭で演奏する予定なのだ。

なんとしても完璧に作り上げて聞かせたいという想いが俺の中にあつた。という訳で彪を家に呼び話し合った。

「ここはやっぱりこういうカンジでさ」

彪がいう。

「いやここは大切にしたいとこれからここは？」

俺が言い返す。

いつもこんなカンジ。なかなか話がかみ合わない。いつもなら。でも今日は違つた。

どちらとも妥協したわけではない。

話がかみ合つた。初めての感覚だつた。いいカンジで作詞・作曲ができた。内容はこんなカンジだ。

「君を待っているよ

知っている言葉だけ紡ぎ合わせて

願いを込めて

歌い続けてる」

ありきたり。

だが一番分かりやすく素直な歌詞だつた。そして音作りもだいたい終わった。

あとはメンバーとあわせて完成になる。

学校祭が待ち遠しくも不安になったのは言うまでもない。

そして曲を完成させ十分に練習した。いよいよ学校祭が明日に迫っていた。そして学校祭当日。

緊張して寝れなかった俺をよそに彪はめちゃくちゃテンションが高かった。

「どした貢？テンション低いぞ？って目の下のクマがすごいことになってるし」

俺は

「いや寝れなかった。どしたんだろうね。」

と素っ気なく答えた。

彪は

「そりゃ告白するんだから当然だろう！まあ結果がどうなるかは俺のしったこっちゃないけどな。」

俺は

「投げやりだな。まあどうなるかはわからないけど一生懸命やるだけさ。」

と答えた。

「うまく行くことを願ってるぜ兄弟！当たって砕けるだ！人生何事も経験だしな。」

と彪がいった。こいつなりに背中を押してくれているのがわかった。ただ

「当たって砕けたらオシマイじゃん！」

とだけ言っておいた。

そしてライブスタート。当然華蓮も呼んでおいた。素直に「聞いてほしい歌がある」

とだけ言っ

て。ライブはなかなか盛り上がり最後に俺がボーカルにまわり歌うことになった。

「この曲は好きな人に聞いてもらいたくて作り上げました。じゃあ

聞いて下さい。タイトルは

「shooting star」

です。」

ちらつと華蓮のいる方を見ると目があった。何か感づいた目をしていた。

「・・・君を待っているよ

知っている言葉だけ紡ぎ合わせて

願いを込めて

歌い続けてる」

終わった。達成感がこみ上げる。ふと華蓮を見ると目から涙が。なぜ？と俺は考えるばかりだった。大盛況だったライブを終え俺は華蓮の元へ。

「どうだった？」

と俺が聞くと華蓮が

「すごくよかったよ」

とだけ言ってくれた。少しの沈黙。いたたまれなくなり俺は

「最後の歌聞いてくれた？あれは華蓮への想いを歌詞にして作ったんだ。なかなかよかったろ？自分で言うのもなんだけど」

俺が言うつと華蓮は

「うん」

とだけ答えた。いまいちはずきりしなかったので

「俺さ華蓮のこと好きなんだ。俺と付き合ってくれないか？」

と言った。言っちゃまった。爆弾発言。

驚いた表情をしていた華蓮が少し間を置いて小さく微笑み一言

「うん」

とだけ頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012a/>

愛する人への贈り物

2011年1月13日01時47分発行